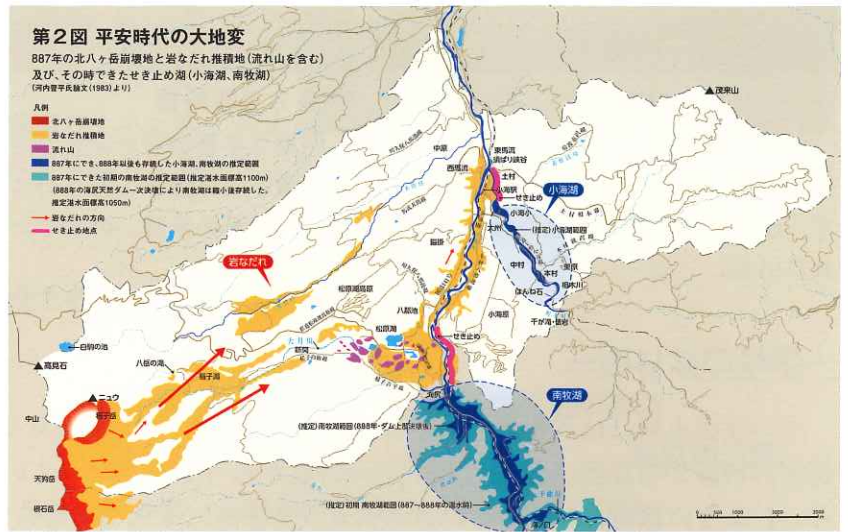


## 一平安時代の大地変一

仁和3年(887)に起こった大地震によって現小海町全体が土砂に覆われて湖が出来て現在の形になった。これは歴史書にも残されている仁和の大災害で、現在の松原、稲子地籍が形成され、失われた小海湖の所は現在の本村、中村地籍である。



## 「小海」の由来

小海町とその周辺には、小海だけでなく海尻・海ノ口・海瀬など「海」と名のつく地名や松原湖・白駒の池等の湖沼、馬流・東馬流といった川に関する地名が多くみられます。海のない長野県でなぜ海や湖、川に関する名前が多く存在するのでしょうか…

平安時代の仁和3年(887)に東海・南海トラフを震源とする巨大地震がおこり、各地で大きな被害がでました。これにより北八ヶ岳の天狗岳・稲子岳が崩れ、大岩なだれが発生し、海尻駅～小海町松原湖駅間で千曲川をせき止め、天然ダム湖「南牧湖」をつくりました。現在の松原湖周辺には、たくさんの「流山」がつくられ、その間には猪名湖・長湖・白子池・うずら取池・ずみの木池・おして海など大小たくさんの湖沼が現れることになったのです。

しかし翌年にはダム上部が決壊し、千曲川流域に大洪水をもたらしたことが当時の文献にも記されており、佐久市砂原遺跡の発掘調査でも確認されています。

「南牧湖」は決壊後も、120年以上湖を形成し、ここから海尻・海ノ口などの地名が生まれたと考えられています。

また同じ岩なだれにより、小海町土村付近でも相木川がせき止められ、「小海湖」がつくられました。

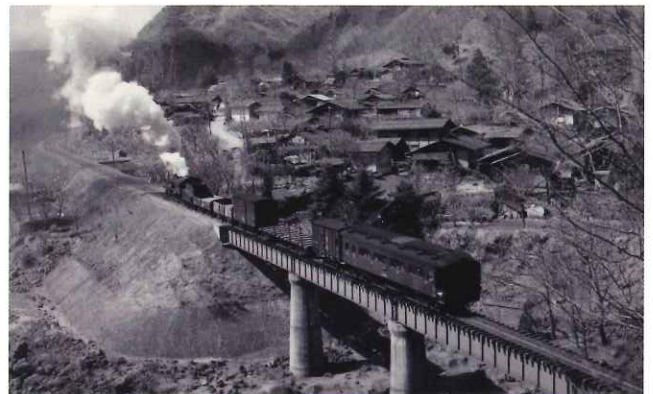
「小海湖」は、戦国時代の古地図にも記されていますので、600年以上湖であったようです。この古地図には湖の絵と「小海村」の地名が書かれていて、湖は小海小学校付近から本村地区まで広がっていた事がわかっています。これが「小海」の名前の由来とされています。天然ダム湖や大小多くの湖沼がみられた風景は、さながら海が広がっているようだったに違いありません。

## 一小海線一

大正4年に中込駅まで開通し、大正8年(1919)小海駅まで開通し、昭和10年(1935)小海線が全通しました。

小海駅の開業により駅の出来た土村、馬流は急速に発展しこの地域の産業の中心地となり、昭和電工を始め、製材工場なども相次いで開業し、土村、馬流の商店街も歓楽街に合わせて、現在では想像も出来ない程の賑わいをみせました。

しかし小海線は地域の足として、また高原列車として、遅い春の佐久路、早く訪れる秋の紅葉などこれからも替える事の出来ない線路です。



## 畠山重忠と竜の伝説

源頼朝という武士が病にかかった時のこと。夢に神様があらわれて『竜の肝を飲めばよい』とお告げがありました。頼朝は家来の畠山重忠に竜の肝を取ってくるように命じました。けれども重忠はどこへ行けばよいかわからず困っていました。

ある夜のこと、今度は重忠の夢に神様があらわれこう言いました。『信州松原湖に住む竜の肝を取りなさい。』

お告げを聞いた重忠がすぐに掛けると、松原神社から弁天島へ下る大弥太坂で母に行きあいました。重忠が母に頼朝の命令を話すと『私が湖中には行って竜になるから、その肝をとって差し上げなさい。』と湖には行っていきました。

たちまち水面に水柱がたち湖面から大きな竜が姿を現しました。重忠は、自分の母とわかっていましたが、今はもう迷う時ではないと、竜を殺して肝を取り頼朝に差し上げました。すると頼朝はたちまち病気がなおったので、重忠の母のために五重塔を建てて供養したといわれています。

## 小海をめざした鯨の夫婦

むかし越後の海に鯨の夫婦がおりました。『信州の佐久に小海という海があるそうぞ。そこへ行って暮らそう。』

早速、鯨の夫婦は千曲川をさかのぼり、海を目指しました。川の幅がせまくなると体を横にして水をせき止めながら、どんどん上っていきました。

佐久の畑八というところまで来た時のこと。『おい、鯨の夫婦よ。どこへいくぞ。』川岸から百姓がたずねました。

『小海という海がこの先にあると聞いたので、そこに行くんじや。』夫の鯨がこたえました。すると百姓は腹をかかえていつまでも大笑い。

さすがに気のよい鯨の夫婦も腹をたて理由をたずねました。すると『小海ってところは海じゃねえぞ。土地の名前だ。』

鯨の夫婦はそれをきいて言葉でもませんでした。そしてきた道をまたしよんぼりと越後の海へ帰っていきました。



## 山の背くらべ

むかし、日本列島の真ん中あたりと、その南の海の近くに二つの山がありました。二つの山は高さも同じくらいでしたので、どちらの方が勝っているのかを気にするようになりました。

そのうち二つの山は噴火をはじめて少しでも背を高くしようとした。『俺のほうが高くなったぞ。』と背比べが終わりません。

見かねた山の神様が長いトヨをみつめてきて、二つの山の頂上におたしてみると、二つの山はなんと同じ高さでした。でも困ったことに、二つの山はそれでも納得しません。そこで神様は下を流れる川の水を両手ですくい、二つの山に言いました。『勝負が決まったらうらみっこなし。文句も言てはいけなぞ』

神様がそっと静かにトヨの中に水を流しこむと水はトヨの中を、南の方へと流れていきます。大喜びの北の山が『勝ったぞ!』と思わず叫ぶと、これを聞いた南の山は頭にきて、トヨで北の山の頭をめちゃくちゃにやぐりました。こうして山の峰はギザギザになってしまいました。

そのうちも短気で負けず嫌いの南の山は、噴火をおこしたので、日本一高い山になりました。

南の山は富士山、ギザギザになった北の山は八ヶ岳です。